魔界女子大生編
美少女達は、魔界の闇に落ち、軟肉を貪り喰われる
作者
大黒達也

魔界女子大生編

作者　大黒達也

【あらすじ】

東京都内の女子大に通う美少女グループが、避暑に出かけた観光地は、魔界への入り口であった。次々に襲われ、激しい凌辱の後に食肉として貪り喰われる美少女達。

【目次】

プロローグ
第一章　狂人の村
第二章　病院
第三章　拉致
第四章　逃走
第五章　人間狩り
第六章　反撃
第七章　捕獲
エピローグ

【登場人物】

白石愛奈（しらいしあいな）

都内の女子大に通う十九歳。グループのリーダ格で責任感が強く、知的な顔立ちをした美少女。

三枝夢（さえぐさゆめ）

十九歳。モデルのような肢体を持ち、瞳が大きな美少女。非常な怖がりで甘えん坊な性格。

沢井（さわい）レオナ

グラマーな肢体を持ち、笑顔が愛くるしい美少女の十九歳。

町田優菜（まちだゆうさい）

美しく清楚な顔立ちと雪のように白い素肌をした美少女であり十九歳。大学の射撃部に所属する。

北条麻衣（ほうじょう まい）

十九歳。ハーフのような美しい顔立ちに色白の素肌であり抜群のスタイルの持ち主。

【本編】

プロローグ

「最高の気分ね！」

麻衣が車の窓から顔を出して、深呼吸をした。

「危ないわよ！」

隣の後部席に座っていた優菜が麻衣の腕を引いた。

「いいじゃない。対向車なんていないんだから」

麻衣が不満そうに口を膨らませた。

赤色のワンボックスカーが、左右を切り立った崖に囲まれた道路を進んでいた。彼女達は、今年の春、都内の大学に入学したばかりだった。

夏の盛り。仲良しグループ五人で、都内から二百キロほど離れた山岳地帯に避暑に来ていた。

運転者は、白石愛奈十九歳。グループのリーダ格で責任感が強く、知的な顔立ちをした美少女だった。助手席に座っているのは、三枝夢十九歳だった。モデルのような肢体を持ち、瞳が大きな美少女だ。

運転席の後ろの後部座席に座っていたのは、グラマーな肢体を持ち、笑顔が愛くるしい美少女の沢井レオナ十九歳だった。その隣に座っているのが、美しく清楚な顔立ちと雪のように白い素肌をした町田優菜十九歳だった。

優菜の隣には、北条麻衣十九歳が座っていた。ハーフのような美しい顔立ちに色白の素肌であり抜群のスタイルの持ち主だ。

皆、素肌が見えるような薄手のタンクトップTシャツに超ミニスカートか桃尻が見えるようなホットパンツを穿いていた。

「ねえ。愛奈。今日は何処に泊まるの？」

麻衣が甘えた声で運転席の愛奈に尋ねた。

「山奥の秘湯よ。楽しみにして」

「ここ電波状況悪いわ。ところでそこって、ウォシュレットあるの？」
レオナがスマホを操作しながら聞いてきた。
「あるわけないでしょう。きっとボットントイレよ」
優菜が会話に割って入った。
「ボットントイレって何よ？」
「レオナって。本当に何も知らないのね？深い穴を掘って溜めておくトイレよ」
「止めて！吐いちゃいそう」
レオナが両耳を塞いで、嫌々という仕草をした。
その時、車両が急停車した。
「どうしたの？」
麻衣が後部座席から身を乗り出して来た。
「落石で道が塞がれているのよ」
運転席の愛奈がドアを開けて外に出た。
車両から十メートルの距離に縦横一メートルほどの岩が道を塞いでいた。
「どうするの？」
助手席から降りて来た夢が、愛奈の肩に手を置い

て尋ねた。
「引き返して別のルートで行くしかないわ」
その後、愛奈は何度もハンドルを切り返し、車両を反転させ反対側に向けて発進させた。暫く進むと車両はまた停車した。
愛奈がハンドルを握り締めて前方を見ていた。誰も少しの間、口を利こうとしなかった。今度は倒木が道を塞いでいた。
「いったい。どうなっているの？」
愛奈が独り言のように呟いた。
「皆。これを見て！」
外に出た麻衣が叫んだ。五人が倒木の根元を取り囲んだ。
「これは、チエンソーで切った痕じゃない」
「一体誰がこんなことするのかしら」
「悪戯じゃ済まされないわ」
「警察に電話した方がいいんじゃない」
「駄目よ。圏外よ」
五人は押し黙った。不安そうに互いに見つめ合った。

「少し戻ったところに別の道があったわ」
愛奈が沈黙を破った。
「何処に通じているの？」
「分らないわ。ナビに表示されるかも」
愛奈が運転席に戻り、エンジンを始動させ、カーナビを覗き込んだ。
「十キロほど進めば村があるようね」
「その村に行くしかないわね」
その村に向かう途中、車内は静寂に包まれていた。皆、口にはしないが、不安を感じていたのだ。落石の件はともかく、倒木は明らかに人間の仕業だった。何者かが、彼女達の進路を妨害しているのだ。目的はわからなかった。

「あれを見て！看板よ」
助手席の夢が、道路脇の立て看板を指差した。車両は速度を落としながら、看板の横を通過した。
「K村まで十キロと書いてあるわ」
「急ぎましょう。日が暮れて来たわ」

車は加速し、林道を時速五十キロで進んで行く。
両脇を原生林で囲まれた林道は、二キロほどで終わり、整備された幅員四メートルほどの道に出た。周囲の風景は一変した。鬱蒼とした森から開けた平原に変わった。ブドウ畑が延々と続いていた。
「意外ときれいな場所ね」
麻衣の言葉に車内の緊張が解けた。
「これ、ブドウ畑よね」
夢が窓を開けて、顔を出し深呼吸をした。
「見ればわかるじゃん。今晩は美味しいワインが飲めそうね」
愛奈が、久しぶりの笑顔を見せた。

第一章　狂人の村

ブドウ畑が途絶え、今度は広大な牧草地となった。彼女達は車内から数百頭の肉牛がのんびりと草を食む様子を眺めていた。
「人がいるわよ」
助手席の夢が、道路沿いを指差した。牧場の関係

者と思われる作業着を着た中年女性がひとり、中腰の姿勢で黙々と鎌で雑草を刈っていた。愛奈は道路脇に停車させた。

車を降りて、その中年女性に近付いた。

「あの、済みません」

「……」

中年女が手を休めて立ち上がった。驚く程背が高い女だった。身長は二メートルを超えると思われる。無言で愛奈を見下ろした。裂け目のような細い目が愛奈のホットパンツから伸びた白く長い足をじっと見詰めた。口元に光るものが見えた。女は唾液を垂らしていた。

「済みません。この辺にホテルか旅館はありませんか？」

愛奈の声は震えを帯びていた。その中年女に異様な雰囲気を感じていたのだ。

「……」

女は無言で首を左右に振り、何事も無かったように草刈を再開した。

「どうだった？」
助手席の夢が、運転席に戻った愛奈に尋ねた。
「無駄だったわ。あの女性何か変よ」

愛奈は急いで車を発進させた。その後、暫く牧草地の間を真っすぐ走る道を進んだ。
「困ったわね。ほとんど燃料が無いわ」
愛奈が独り言にように言った。
「えっ。燃料が切れたらどうなっちゃうの？」
麻衣の声は微かに震えを帯びていた。
「この辺りで野宿するしかないわね」
「夕食もお風呂も無しってこと！」
「当たり前じゃない」
「誰かに道を倒木で塞がれたのよ。女だけじゃ、変質者に強姦されちゃうわ」
「強姦だけで済めばいいけど、殺されちゃうかもね」
レオナが指で首を切る仕草を麻衣に見せつけた。
「いや！」
その後、車内は沈鬱な雰囲気に包まれた。誰もが

一言も話さなかった。

「あそこにも人がいるわ！」

麻衣が沈黙を破った。

さきほどと同じような作業着を着た中年女が、トラクターで牧草を刈り取っていた。

「あの人にも聞いてみる？」

夢が愛奈に声をかけた。

「そうね」

車はトラクターの近くに停車した。

「今度は私が聞いて来るわ」

後部座席の麻衣がドアを開けて走り出した。トラクターに近付き女に声を掛けた。

麻衣とその中年女は少しの間、会話を続けた。

「今度の人は口が利けるようね」

「あの。済みませんが、この辺にガソリンスタンドはありませんか？」

「そんなものは無いよ」
でっぷりと太り相撲取り並みの巨体を持つ五十代くらいの女がトラクターの運転席から麻衣を見下ろし、憮然とした表情で答えた。
「そうですか……」
麻衣はがっくりと肩を落とした。都会育ちの麻衣にとり、野宿など耐えられなかった。脳裏には変質者により、犯され殺害される妄想が過った。
「ガソリンならあるよ。そこに保管しているんだ」
女はトラクターの近くにあるプレハブ小屋を指差した。
「分けてくれませんか」
麻衣は満面の笑みを浮かべた。
「あんた。学生さんかい？」
「そうですけど」
「分けてやってもいいよ」
「本当ですか！」
「ただではやれないよ」
「もちろんお金はお支払いします」
「金なんていらないよ」

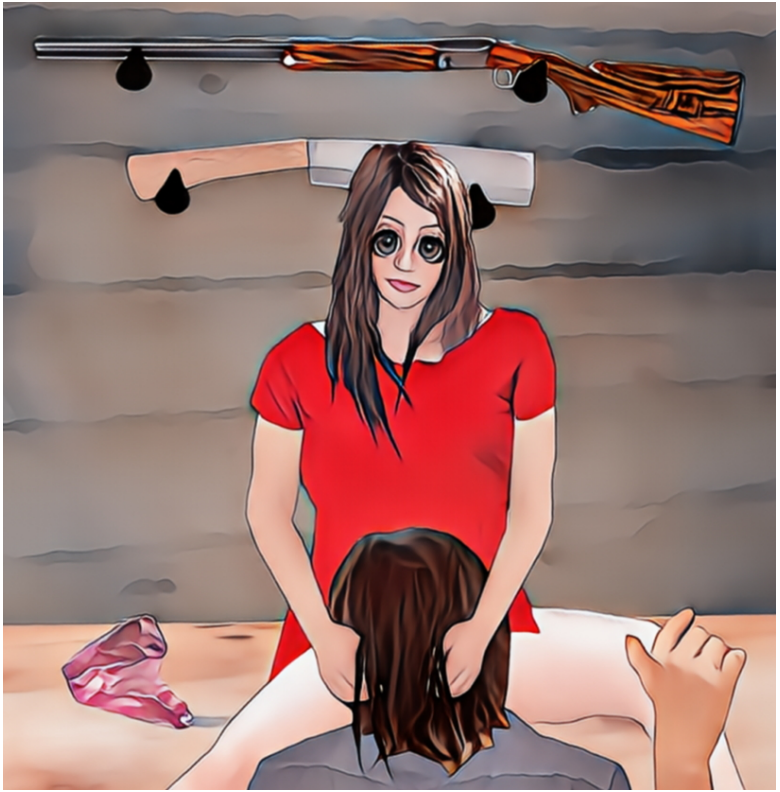
「では、何でお支払いすればいいのですか？」
「そうだね」
中年女は、超ミニスカートから伸びる白い太腿を食い入るように見詰めた。
「なんですか？」
麻衣は中年女の視線に不気味なものを感じた。
「オマ＊コとケツの穴を舐めさせてくれたら好きなだけやるよ」
「……、えっ」
麻衣は一瞬己が耳を疑った。
「嫌ならいいんだ。もうすぐ暗くなるよ。この辺りには熊がでるから気をつけな」
中年女は、トラクターのエンジンを始動させ、沈みゆく夕日を指差した。
「待ってください。わかりました。本当にガソリンを分けてくれるんですね。ちょっと待っていて下さい」
麻衣は小走りで仲間が待つ車に戻った。
「ガソリンを分けてくれるって」
「やったじゃん。手伝うよ」

夢が助手席のドアを開けようとした。
「大丈夫。皆はここで待っていて。ポリタンクに入れるから十分くらいかかるわ」
麻衣は再びトラクターに向かって駆けだした。
中年女は、プレハブ小屋のドアを開けて中に入ったところだ。麻衣もその後に続いた。

広さ六畳ほどのプレハブ小屋の隅には、液体が入ったポリタンクが置かれていた。壁には散弾銃が無造作な感じでフックに駆けられていた。麻衣の視線が釘付けになった。平然と恥部を舐めさせろと口にする中年女に当然ながら狂気を感じていた。何をされるかわからなかった。
「さあ、パンティを脱いでおくれ」
「分りました。約束ですよ」
蚊の鳴く様な声で言い、パンティを脱いだ。すぐに中年女が麻衣の前に膝を付き、覗き込んで来た。
「お嬢ちゃん。ピンク色できれいなオマ＊コだよ。ほとんど使っていないようだね」

中年女が麻衣の前で膝間付き白い尻に両手で抱き付き、音を立てて膣口を舐り出した。麻衣は両手で顔を覆い、歯を食いしばり必死に耐えていた。脂ぎった顔で不潔な感じのする中年女に舐られているのだ。耐えられるものではなかった。

「若い娘のマ＊コは美味しいね。食べてしまいたい



よ。今度は尻を見せな」

麻衣は後ろ向きなり、作業台に両手をついた。

「本当にきれいなお尻だね。白くてすべすべだよ。ここはぎっしりとお肉が詰まって美味しそうだね。匂いもしないね。ウォシュレット使っているのかい？」

すぐにざらついた舌がアヌスに粘りついてきた。

「止めて。そんなところ舐めないで」

麻衣が泣き叫んだ。

「お前のケツは本当に美味しいよ」
中年女は舌をアヌスに差し込んで来た。アヌスを強く舐りながら、指先を根本まで膣に挿入してきた。思わず喘ぎ声を上げた。意に反して、中年女の性技に溺れそうになっていた。最後は作業台の上に突っ伏し、中年女の顔に尻を擦りつけながら果てた。

「遅かったわね」
愛奈が、ポリタンクを両手で持ち、車に近付いて来る麻衣に近付いた。
「御免。色々とあってね」
「どうしたの顔色悪いわよ」
「何でもないわ。ちょっと疲れただけよ。十リッター分けてもらったわ」
「野宿しなくて済みそうね」
愛奈は車にガソリンを給油し、車を発進させた。
麻衣は茫然とした表情で窓外を眺めていた。
「どうしたの？麻衣。いつもの調子じゃないわね」
「疲れただけよ」

「何？アンタノーパンじゃない！さっきからスカートを抑えていたから変だと思ったわ」
隣に座っていた優菜が、麻衣のミニスカートを捲り上げた。
「止めてよ！」
麻衣が両手でミニスカートを抑えた。
「さっきから、様子がおかしかったけど、何かあったの？」
愛奈が運転席から尋ねた。
「パンティは……ガソリンと交換したのよ……」
麻衣は囁くように言った。中年女に下半身を舐られたことは伏せた。中年女は麻衣の膣口やアヌスで楽しんだ後で、パンティを渡すように要求してきた。ガソリン代は麻衣の身体で支払って貰ったが、ポリタンクはパンティと交換というのが言い分だった。
パンティの匂いを嗅ぐ中年女の不気味な笑みが脳裏に浮かんだ。
「パンティと交換だなんて。あのオバサン、レズビアンだったの？」
夢が助手席から麻衣の方を向き興味深々と言っ

た顔で麻衣に尋ねた。
「アンタ。あのオバサンにやられちゃったんじゃないの？」
優菜が尚も麻衣のミニスカートを捲り上げようとした。
「そんなに見たいなら見なよ」
麻衣が自分でミニスカートを捲り上げ優菜を睨み付けた。
「濡れてるじゃ！」
優菜が息がかかるほど麻衣の下半身に顔を近付けた。
「アンタ達。いい加減にしなよ。レズなの？」
優菜の隣に座っていたレオナが顔をしかめた。
「今夜は私が慰めてあげようか」
レオナを無視して麻衣の太腿を触りながら耳元で囁いた。
「何！ここ、圏外だって！信じられない！」
スマホを見ていたレオナが突然声を上げた。
「本当？」
全員がスマホを覗き込んだ。

「ねえ。愛奈。スマホ使えない場所なんて止めようよ」

レオナが悲痛な声を上げた。

「仕方ないじゃない。戻る道は無いのよ。行くしかないの」

愛奈がバックミラーに写るレオナの顔を見ながら宥めた。

その時、不意に通り過ぎた横道からパトカーが飛び出して来た。

サイレンを鳴らし、停車するように警官がスピーカで指示した。

二十代半ばの女性警官が運転席の窓側に立った。窓を開けるように手で指示をした。

「ちょっと速度が出ていましたね。運転免許証を見せて下さい」

「済みません。慣れない道で」

愛奈が免許証を女性警官に手渡しながら言い訳をした。

「旅行ですか？」

「はい」

「皆若いですね。学生さん？」
女性警官はさっと車内を見渡した。
「はい」
「速度超過は少しだったので、キップは切りませんね」
運転免許証を愛奈に返した。
「本当ですか？ありがとうございます」
「どちらまで行かれるのですか？」
「旅館かホテルを探しています」
「この村にはありませんよ。そうだ知り合いを紹介しましょう。一晩なら停めてくれるかも知れません」
「お巡りさん」
その時、後部座席のレオナが女性警官に声を掛けた。
「何ですか？」
「ここに来る途中。倒木で道を塞がれていました。チェーンソーで切り倒した跡がありました」
「本当ですか？」
「ちょうどこの辺りです」

愛奈が道路地図を取り出し、場所を指差した。
「悪戯にしては悪質ですね。貴女達を送り届けたら調べてみましょう」
その後、愛奈たちの車はパトカーに先導され、女性警官の知人宅へと案内された。

第二章　病院

山際に夕日が沈むころ、愛奈達が乗るバンが、パトカーに先導され、原野の只中にある家に到着した。道路沿いに面した鉄筋コンクリート製の二階建てで一般住宅の造りではなかった。建物の背後には広大な牧場や畑が広がっていた。

バンとパトカーは、敷地内に駐車した。建物のガラス扉から白衣を着た二十代後半くらいの美しい女が出て来た。
「こんばんわ。まあ、皆さん可愛いわね」
「里奈さん。一晩彼女達を泊めて欲しいんだけど」
「いいですよ。空いている病室で良ければ、大歓迎

です」
「初めまして、白石愛奈です」
グループのリーダ格である愛奈が最初に挨拶をした。
「私は香月里奈といいます。この病院のいる医院長です」
「ここ病院なんですね」
「こんな田舎に不似合ですよね」
「そんなことはありません」
「病院と農家を兼業しています。立ち話も何なんで入りましょう」
「じゃあ。彼女達を宜しくお願いします」
女性警官はその場を立ち去った。

その後、五人は病院の浴場で汗を流した。
入浴の後で、食堂に招かれた。
「こんなものしか用意できなかったけれど食べて下さい」
医院長の里奈が、彼女達に夕食を勧めた。
五人が座るテーブルには、熱々のビーフステーキ

や野菜の炒め物や大盛りの野菜サラダなどの料理が所狭しと並べられていた。メロンやブドウ等の果物まで用意されていた。

「突然、お邪魔したのに済みません」

愛奈が里奈に向かって頭を下げた。

「いいのよ。あなた達みたいに可愛い娘さん達なら大歓迎よ」

「この肉はこの辺でとれたものですか？」

「特産品の牛肉よ。丁度あなた達位の若い雌牛のお肉よ」

「えっ。そうなんですか？」

「あなた達も本当に美味しそうよ。さあ、食べてね。私は仕事があるから戻るね」

里奈は皆を残し食堂を出て行った。

「里奈さん、もしかしてレズビアンなのかな」

「そうよね。私達が美味しそうなんて」

「ジョークに決まっているでしょう。さあ、食べよう」

「ラッキーだったわね」
「そうね。今夜は野宿と諦めていたわ」
麻衣と優菜はひとつのベッドに腰かけていた。麻衣が前を向き、優菜が彼女の横顔を見詰めていた。
ふたりは二階の病室に泊まることになった。他の娘達は、隣の病室を与えられた。
部屋の広さは十畳ほどでベッドが二つ並べられていた。
「もう寝ようよ」
麻衣がベッドの上で大きな欠伸をして毛布に包まった。
「もう寝ちゃうの？」
優菜が麻衣の毛布を剥いで、抱き付いた。
「止めて。今日は疲れたのよ」
「アンタ。あのデブ女に抱かれたでしょう？」
優菜が耳元で囁いた。
「まだ、言っているの？そうよ。ガソリンと交換でアソコを舐めさせたのよ。気が済んだ」
「やっぱり、犯られたんだ。気持ちよかった？」
優菜が麻衣のパンティに手を差し入れて来た。

「ちょっと。止めてよ。あんなオバサンに舐められて気持ちいいわけないじゃん」
優菜の手をどけようとしたが、力が入らなかった。
「濡れているよ。思い出しているの？」
「濡れてなんかいないよ」
そう言うのがやっとだった。優菜の柔らかい指先が膣内を動き回っていた。
「舐めてあげるね」
優菜が、麻衣のパンティを引き下ろし、膣口を舐り始めた。
「駄目よ。そんなところ。汚いじゃん」
「石鹸の匂いがするよ」
優菜の舌が膣口やクリトリスの上を這い回っていた。その後麻衣は、何度も手と舌で逝かされた。麻衣も優菜が嫌いではなかった。

「どうしたの？」

優菜が、ベッドから降りた麻衣に寝ぼけた声をかけた。

「汗かいちゃったから、シャワーを浴びて来るわ」
「行ってらっしゃい」
優菜は一言言ってから、寝息を立て始めた。
麻衣は、病院の一階にある大浴場に向かった。病院内に入院患者はいないのかひっそりと静まり返っていた。途中でナースセンターの横を通った。照明はついているが看護師の姿は見えなかった。

大浴場には誰もいなかった。脱衣場でパジャマと下着を脱いで浴室に入った。
浴槽の湯は抜かれていたのでシャワーを浴びることにした。

シャワーで汗を流した後で、脱衣場に戻った。
「ないわ……」
自分のパジャマや下着がなくなっていた。
その時、ドアが突然開いた。

「誰だい？こんな真夜中に」
作業着を着てモップを持った病院関係者らしい中年女が入って来た。
「済みません。汗かいちゃったんで……あ、あなたは……」
「アンタだったのかい？昼間は御馳走様でした」
作業員は、ガソリンと交換に麻衣の性器を舐めた中年女だった。
中年女は、肥え太った身体を揺らせながら麻衣に近付いてきた。麻衣は豊かな乳房と下半身を手で隠して、後ずさった。
「あの……私の服知りませんか？」
「可愛いパジャマと色っぽいパンティのことかい？それなら忘れ物として処理したよ」
「忘れ物？さっきから私はシャワーを浴びていましたよ。私がいることに気つかなかったんですか？」
「アタシャ忙しんだよ。いちいち確認なんかしないよ」
「どこにあるんですか？」

「そこの黒い箱を開けてみなよ」

中年女は、壁際にある縦横一メートル程の黒い箱を指差した。

結衣は中年女に背を向けて箱を開けた。
「まったくいいケツしているね」
それが、麻衣がその時に聞いた最後の言葉だった。
頭部を何かで強打され意識を失った。

麻衣は薄暗い部屋で意識を戻した。何かの硬い台の上に仰向けに横たえられていた。口をタオルで塞がれていた。股間で何かが動いていた。膣口を激しい勢いで舐られていた。
「気が付いたかい？お前のココは本当に美味しいね」
麻衣のクリトリスを舐っていた中年女が愛液に塗れた顔を上げた。
「……」
中年女のざらついた舌が股間を這い回っていた。麻衣は恐怖の余り気がおかしくなりかけていた。麻衣は中年女に拉致されたのだ。これは明らかに犯罪だった。無事で返されるとは、到底思えなかった。
反対向きにされ、今度はアヌスを激しい勢いで舐

られた。恐怖の余り、ただ震え戦くばかりだった。
舌はアヌスを抉じ開けようとしていた。直腸にとどけと言わんばかりに激しく舌で突いてきた。無防備なクリトリスを指先で刺激された。命の危険を感じながらも身体は反応を見せ始めた。
「感じているじゃないか！」
楽しそうな笑い声が麻衣に追い打ちをかけてきた。

「愛奈！起きて！」
優菜が愛奈と夢とレオナが寝ている部屋に飛び込んで来た。
「どうしたの？こんな時間に」
愛奈が眠そうな顔をしてベッドの上で大きな欠伸をした。
「麻衣がお風呂に行ったきり戻って来ないのよ」
「お風呂で寝ているんじゃないの？」
「そうなのかな。でももう三時間だよ。ねえ。一緒に風呂場まで付き合って」

「わかったわよ」

三十分後、愛奈達四人は、昼間病院まで案内してくれた女性警官と会っていた。

麻衣が風呂場から戻らず、病院内のどこにもいなかったため、医院長を内線電話で呼び出し、警官を呼んでもらったのだ。

「麻衣さんは、散歩にでも行ったのですかね」

女性警官は、ガラスドアから外の暗がりを見詰めた。

「そんな筈はありません。あの娘怖がりなんです。ひとりで散歩に行くなんてあり得ません」

「だって。ひとりでお風呂に行ったんでしょう？」

「そうですけど。懐中電灯もないのに。外に行くなんて……」

「わかりました。兎に角病院の周辺を探してみます」

その後、女性警官と愛奈達は病院の周辺を捜したが、麻衣は見つからなかった。

第三章　拉致

その頃、病院から三キロほど距離がある医院長の香月里奈の家を肩に大きな麻袋を背負った中年女が現れた。

「入らっしゃい。由美叔母さん」

里奈が肥え太った由美を笑顔で迎い入れた。

「獲物だよ」

由美がテーブルの上に麻袋を置いた。

「可愛い！」

里奈が麻袋を開けて中を覗き込んだ。

由美が麻袋に片手を入れて失神から覚めぬ麻衣の白い裸身を引き出した。

「叔母さん。十分に楽しんだんでしょう？」

「ああ。後はこいつの肉を食べるのが楽しみだね」

「叔母さんは居間で少し休んでいて。花子叔母さんと少し楽しませてもらうわ」

それまで壁際に無言で立っていた身長二メートル以上ある大女が無造作な感じで麻衣の白い裸身を片手で担ぎ上げた。

数分後、大女の花子は、失神から覚めない麻衣をベッドにうつ伏せにしてピンク色のアヌスを激しい勢いで舐っていた。舐るというか貪る感じだ。

近くにある一人掛けのソファには里奈が腰かけ、グラスで赤ワインを飲んでいた。

「御汁は出ているの？」

里奈の問いに対し、花子は麻衣のアヌスを吸いながら、緩慢に大きく頷いた。

里奈はワイングラスを置いて立ち上がった。股間には禍々しい感じの張形が装着されていた。

里奈は花子の肩を軽く叩いた。花子は麻衣の白い裸身から離れた。

里奈は麻衣の膣口に巨大な張形の先端を押し当て一気に突き入れた。

麻衣のクリトリスを指先で刺激しながら、腰を前後に激しく動かした、張形の根元にはバイブが付いていて、里奈のクリトリスも同時に刺激された。

麻衣の白い裸身が里奈の下で木の葉のように揺れ動いていた。花子は麻衣の乳房を両手で揉んでいた。激しい凌辱は、その後半日の間、続けられた。

麻衣が意識を取り戻した際には、由美も加わり女三人で麻衣を様々な器具や舌や手で犯した。麻衣が泣き叫び許しを請うても聞き入れられなかった。

最後には、里奈により巨大な浣腸器をアヌスに差し込まれ中身をすべて腸内に放出された。その後、トイレに連れて行かれ三人の目の前で排泄を強要された。人間に対する扱いでは無かった。麻衣は既に己が人生を諦めていた。この狂った三人の女達に嬲り殺される運命と悟っていた。

一時間後、三人は調理服に着替え、厨房に集まっていた。彼女達の視線の先には、調理台の上に全裸で横たえられた麻衣の姿があった。麻衣には意識があった。

激しい恐怖を湛えた大きな瞳が、三人がそれぞれ手にした包丁や斧や鋸を見詰めていた。

「お願い。殺さないで下さい……」

「お肉が口をきいては駄目ですよ。これから美味しく料理してあげますからね」

里奈が麻衣のアヌスに指先を入れかき回した。その指先の匂いを嗅ぎ、さらに指先を舌で舐め回した。

「里奈ちゃん。味はどうだい？」

由美が口元に唾液を湛えながら、尋ねた。

「浣腸は完璧ね。何の匂いもしないわ。味は、そうね。少し塩気があるかな」

答えながら叔母の花子に向かい、自分の首を指で切る動作を見せた。

花子は無言で大きく頷き、斧を振り上げた。

厨房に麻衣の悲鳴が響き渡り、すぐに静寂が戻った。

深夜零時頃。病院では愛奈達四人が、三階にある病室で眠りについていた。

麻衣の捜索は翌朝、明るくなってから再開することになっていた。

愛奈が目覚め、起き上った。

「どうしたの？」

隣に寝ていた夢が寝ぼけた声で尋ねた。

「トイレよ」
「一人で大丈夫？」
「当たり前じゃない」
愛奈がひとりで三階の端にあるトイレに向かった。同じ病室のベッドでは、優菜とレオナが可愛い寝息を立てていた。

愛奈がトイレで用を足しているとき、病室の方から女達の叫び声が聞こえてきた。急いで戻ると、昼間見かけた大女が、全裸でベッドに横たわる夢の股間を押し広げ、膣口を舐めまわしていた。床にはレオナと優菜が全裸で後ろ手を紐で縛られ横たわっていた。彼女達が着ていたパジャマが切り裂かれ床に散らばっていた。
「何やっているの！」
愛奈は病室の隅に置いてあったモップを振り上げ、大女の背中に叩き付けた。
愛奈は高校時代に剣道部に所属していた。大女が両手を頭上に広げ、襲い掛かってきた。気合とともにモップの先で大女の喉を突いた。大女は堪らず、

喉を抑え、呻き声を上げながら床を転げ回った。

「大丈夫！」

床に転がっていた女達を拘束していた紐を解いた。

その時、大女に背後から抱き付かれた。丸太のような腕で上半身を締め上げられた。

空いている手で、愛奈が着ていたパジャマが引き裂かれた。パンティも紙のように引き千切られた。床にうつ伏せの姿勢で押えつけられ、ざらついた舌でアヌスを舐られた。

不意に何かを叩き付ける鈍い音がして、自由になった。横で大女が頭部から血を流し、のたうち回っていた。優菜が茫然とした表情で傍に立っていた。手には花瓶を持っていた。

愛奈は起き上り、床に落ちていたモップを握り締めた。大女を叩きつけようとしたが、素早い動作で起き上り、喉を腕で防御しながら愛奈に突進してきた。モップが水平に動き、大女の腹部を強打した。それでも大女は向かって来た。

何とか躱して横に逃げた。大女が勢い余って、窓

を突き破り、三階下の地面に墜落した。
「やっつけたの？」
優菜が、割れた窓から身を乗り出して、地面を見下ろした。
隣に愛奈が駆けつけた。
「あいつ。人間じゃないわ」
三階から地面に叩き付けられた大女が、何事も無かったように起き上り、二人目掛けて中指を突き出した。それから巨体を揺すりながら、正面玄関に消えた。
「逃げるのよ」
「待って。裸じゃ無理よ」
「着替えがあったでしょう」
四人はそれぞれの旅行鞄を開けた。
「無いわ。服も下着も全部盗まれている」
夢が悲痛な声で言った。
「行こう。あいつがやって来るよ」
愛奈が夢の腕を掴み、廊下に走った。レオナと優菜も後に続いた。四人とも全裸だった。
部屋を出た四人はエレベータに走った。

「早く来て！」

レオナが何度もエレベータのスイッチを押した。扉が開いたとき、大女が廊下の反対側に現れた。

四人は泣き喚きながら、エレベータに走り込んで、一階のスイッチを押した。ドアが閉じる寸前に大女が戸口に立った。優菜が旅行鞄から化粧用スプレーを取り出し侵入しようとする大女の顔に吹きかけた。

大女は顔を両手で押さえて苦しそうな呻き声を上げた。その隙にドアが閉じた。

四人は、屋外駐車場に止めてある車に走った。

「早く車を出して！」

「わかってるわ！」

愛奈が運転席に乗り、エンジンをかけようとしたが、かからなかった。

「どうなっているの？」

愛奈は車外に出てボンネットを開けた。ある筈のバッテリが無かった。

「皆。外に出て！」

「どうしたの？」

「バッテリが盗まれたわ」
「あいつが来る！」
夢が正面玄関を飛び出して来た大女を指差した。
四人は泣き叫びながら、病院の外に向かって走った。大女が両手を大きく広げ追いかけて来た。夢は恐怖の余り、走りながら失禁していた。
街路灯が無く、月明かりだけの道をひた走った。
前方に人影が見えた。
「助けて下さい！」
四人は助けを求めながら走り寄った。
人影は、昼間ガソリンを譲って貰った中年女だった。手には鎌を持っていた。
「皆素っ裸だとわね。旨そうな身体だね。花子姉さん！早くこっちに来て女達を捕まえるのを手伝っておくれ！」
中年女は、追いかけて来た大女に手を振った。
「こいつも仲間よ！」
愛奈は三人を脇道に誘導した。
「逃げても無駄だよ」
大女と中年女は、二人で愛奈達を追いかけて来た。

すぐに両側が深い森になった。少し進むと高さ三メートル以上ある鉄柵に道を塞がれた。

「あいつ等が来るよ！」

四人は鉄柵にしがみ付き登ろうとした。

「開けられるわ」

愛奈が鉄柵の一部が扉になっていることに気が付いた。四人は扉を開けて鉄柵を潜り抜けた。

「飛んで火にいる夏の虫だね」

由美が鉄柵の扉を閉めて外から鍵をかけた。

第四章　逃走

へと続く。